

2018  
おもろ  
チャレンジ

## ヒジャブ・ファッションの将来をさぐる

総合人間学部 2年

齊藤 喬

インドネシア

2018年9月22日-

2018年10月13日



### 渡航概要と内容

インドネシアでの3週間の滞在では、主に、ジャカルタのモールにあるヒジャブの店での調査と、インドネシア大学構内でのインタビュー調査を行った。また、友人宅を訪問し、その友人の家族から話を聞いた。また、インドネシア大学の教授に学術的な視点からインタビューに協力していただいた。

ムスリムがヒジャブをつける際に、どのようなスタイル・柄のヒジャブを選択しているのかについて、インタビュー調査で明らかにすることを目指した。モールにあるヒジャブの店では、ヒジャブ販売に関わる店員の方から、ヒジャブのデザインの時代による変化や現在での流行、イスラム教の教義で定められているヒジャブへの認識について話を聞いた。また、インドネシア大学構内でのインタビューでは、ヒジャブを着用しているムスリムだけでなく、様々な宗教的背景を持つ人にインタビューを行った。ヒジャブを着用しているムスリムの女性には、ヒジャブを着用し始めた理由、どのようなデザインのヒジャブをよく着用しているのかを尋ねた。また、ヒジャブを着用していないムスリムの女性には、ヒジャブを着用していない理由とヒジャブのデザインの現在での流行について尋ねた。また、ムスリムの男性には、男性の視点から見たヒジャブのデザインの流行への認識を尋ねた。また、イスラム教以外の宗教の人には、その宗教から見たヒジャブのデザインの流行、イスラム教の教義の中のヒジャブというものへの認識を尋ねた。

ヒジャブについての話は、センシティブな側面を持つ話であるにも関わらず、私の予想以上に40人も多くの人がインタビューに答えてくださった。調査の結果から、人々のヒジャブへの認識の多様さが明らかになった。その中でも、現在は、ファッション性を重視したヒジャブが人気であることがわかった。大学生や若者の間では、シンプルなヒジャブの方が普段の服と合わせやすく好きな服を着ることができ、よりファッション性を高めることができるという理由から、無地のヒジャブが人気であった。しかし、40代以上の女性の間では、無地ではなく花柄やグラ

デーシヨンのデザインのヒジャブが人気であった。また、ヒジャブのデザインだけでなく、つけ方においてファッション性を高めている人が多くいた。イスラム教のコーランでは、自分の胸が隠れるぐらいの長さのヒジャブを被るように書かれているが、最近の若者の中では、自分の首までの長さの比較的短いヒジャブを被っている人が多かった。また、40代以上の女性の中では、帽子のようにヒジャブの形が作ってありそれを被るだけでよいインスタントなタイプのヒジャブが人気であるようだ。このように、世代間の差はあるものの、人気のある柄やヒジャブの着用方法がわかった。ヒジャブの店の店員からも、同じような情報が得られた。しかし、ヒジャブをファッションにとらえるかどうかという点については、世代を超えて意見が分かれている。しかし、もともとヒジャブはファッションではないが、現在においてはファッションの一部と多くの人々が認識するようになったため、自らもファッションと考えるようになったと答えた人が多くいた。その一方で、このようなファッション化の流れを嫌う人や、逆に、ファッション化することでヒジャブを着用していない人にも着用してもらうきっかけを与えるとして、この流れを肯定的に捉える人もいた。

以上のことから、現在のヒジャブは、デザイン・スタイル共にファッション化していることがわかった。この大きな理由として、1990年以降の情報技術の発展により、海外から様々なイスラム教に関する知識が流入し、その時に、ヒジャブについての情報がたくさん流入した。それ以降、ヒジャブを着用する人やヒジャブをファッションとしてとらえる人が増えてきた。しかし、インタビューを通して、多くのムスリムはヒジャブをつけていることに自由を感じているような印象を受けたが、実際にその自由はヒジャブの着用を自由に決められるという状況に自らが置かれて初めて実現されるものであり、現在は、ヒジャブを着用しなければいけない、少なくとも着用すべきだという社会的な圧力があるように感じ、本当にこれが自由な選択なのか、私は疑問に思った。これを明らかにしていくことは今後の課題である。ヒジャブは将来もよりファッション化していき、その中で、ヒジャブのデザインだけでなく、スタイルも新たなものが出てくるのではないかと考える。和柄や西洋で人気なデザインなど、外国の伝統的なデザインや柄を採用し、文化を融合させたようなデザインのヒジャブが出てくると考える。

渡航中に日本との文化の違いから苦労したことは、バスの女性専用座席についてである。ジャカルタでは、電車には女性専用車両があるのはもちろんのこと、1台のバスの中に女性専用スペースがある。私はバスにもそのような仕組みがあることを知らず、誤って女性専用スペースの座席に座ろうとしたことがあった。横にいた友達が注意してくれ、また周囲の人も私が日本人の大学生ということを理解して笑ってくれていたが、本当はあってはいけないことである。そのような、文化の違いによる、日本にない仕組の違いに苦労した。また、物乞いをしている人がたくさんおり、その人たちにどのように対応すべきか、困ったこともあった。

渡航中に大きなトラブルは起きなかった。これは、後述するが、ほぼ毎日インドネシア人の友人が調査に付き添ってくれたため、自分1人で遠くまで外出することはなかったことが大きな要因だと考えられる。



インタビュー調査に協力していただいた家のご家族



インタビュー調査に協力していただいた  
ヒジャブの店の店長



ヒジャブの店の様子



インタビュー調査の様子



ヒジャブの店の様子



ヒジャブの店の様子

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航を通して最も強く感じたことは、インドネシアの文化の多様性である。インドネシアは、宗教・民族など、様々な文化背景を持った人が集まっている国だ。インドネシア人は、決して単一の民族ではないということ、知識だけではなく身を持って体感した。ヒジャブに関しても、同じイスラム教であっても、解釈や理解、その教えを実行していく方法が人によって非常に大きく異なっていた。多様な国である一方、非常に寛容な国であり、人々が互いに認め合っている国

であると感じた。その多様性を見る1つの視点として、今回私は「ヒジャブ」を取り上げた。私たちは海外について考える時に、よく無意識のうちに色眼鏡をつけて考えてしまっていると感じた。実際に自分の目でその国の様子を見てその国の人と話をすることで、その国の真の姿を見ることができる。そうすることによって、その国の人々の考え方や文化の在り方、その国の課題や他国が見習うべき点などが明らかになっていくと感じた。

## ■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の調査での結果は、学会で発表し論文にまとめる予定である。

今回の渡航では、インタビュー調査を通して、人々と会話して交流することにより、その国の文化を明らかにしていくというフィールドワーク調査のおもしろさを強く感じた。インタビューをすることで、その人が考えていることを直接聞くことができる。また、話は多岐にわたり、調査の内容以外にも様々なことについて会話できる。私は、その国の文化はその国に住む人々がどのように考えてどう行動するかということによって形成されていくと考えている。インタビュー調査は、人々がどのように考えているのかということを感じることができるチャンスだと感じた。今回の調査でインタビュー調査のおもしろさを強く感じた。今後も機会があれば、インタビュー調査を続けたいと思う。

## ■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

インドネシアで調査するにあたり、調査内容のアドバイスやインタビューの質問項目作成、現地でのインタビューのサポート・通訳、現地での移動や食事などの生活面でのサポートなど、私がインドネシアに1人で行き三週間滞在して調査をするにあたって、友人学生やお世話になっている大学教授・インドネシア語講師など、様々な方のサポートを得ることができ、その方々のおかげで、充実した安全な日々を送ることができた。現地では、ほぼ毎日、少なくとも1人以上のインドネシア人の学生と一緒に行動して、調査のサポートをしてくれたため、安心して調査を行うことができた。現地での生活や言語に自信のある人以外は、そのようなサポートをしてくれる人がいた方が安心であると思う。また、その方のおかげで、知人を紹介してもらい友好関係が広がったということもあった。そのため、現地や日本で自分の調査をサポートしてくれる人を見つけることが非常に重要であると考えている。その方が、自分1人で研究するよりもより良い成果が得られ、危機管理対策上非常に重要であると考えている。

## ■ 主な奨学金の使途

\*渡航費

\*現地調査費

\*宿泊費

\*諸経費、海外旅行保険 など